

[海外研究・教育活動]

競泳日本代表チーム帯同報告

新潟医療福祉大学 医療技術学部 理学療法学科 地 神 裕 史

今回、競泳日本代表チームの帯同トレーナーとしてユニバーシアード大会とその直後の世界水泳直前合宿のサポートをさせていただきましたので以下に報告します。

1. 帯同期間

2009/6/25～6/28：国内直前合宿（国立スポーツ科学センター）

2009/6/29～7/4：移動・現地での調整（ドイツ・ミュンヘン、セルビア・ベオグラード）

2009/7/5～7/11：大会期間（セルビア・ベオグラード）

2009/7/12～7/19：世界水泳直前合宿（ルクセンブルク）

2. 選手団

選手36名、コーチ7名、ドクター1名、シャペロン1名、トレーナー3名

3. 帯同トレーナー

地神 裕史（新潟医療福祉大学）

辻端 大輔（神奈川脳神経外科クリニック）

上岡 尚代（了徳寺大学）

4. 雑感

大会が行われたセルビアという国は、治安や気候、食事などの情報を事前に入手することがあまりできなかったため、現地に到着するまで不安がたくさんありました。しかし、ベオグラードの町は予想以上に穏やかで、気候的にも過ごしやすかったです。食事に関しては多少口に合わない選手もいましたが、日本から持ってきた食品をうまく利用していました。突然の豪雨などに見舞われることもありましたが、気候は15℃～33℃前後と比較的過ごしやすく、特に大きなトラブルもなく選手は各自の力を存分に発揮できた大会でした。

私は今回チーフトレーナーということで、事前の準備や様々な調整をしなくてはなりませんでした。前回のタイ・バンコク大会に続いてのユニバーシアード大会の帯同だったので、比較的余裕をもって行動することができました。セルビアの現地情報が少ない中、何を準備したらよいのか不安もありましたが、シャペロンと現地で様々な物を準備することができました。

近年、水泳選手がトレーナーに要望する内容が、単なる全身のマッサージのみではなく、泳ぎ方も含めた全身の調整（左右差や上肢と下肢の協調性など）を希望する選手が多くなっているように感じます。その一環として体幹のスタビリティの評価やその対処方法の習得が必要不可欠であることを再確認しました。また1日当たりの対応件数も前回よりも減っていることから、セルフコンディショニングの意識が選手のみならずコーチにも浸透してきていることが感じられました。

最後に、今回このような経験をさせていただいたJOCや日本水泳連盟の方々、日本水泳トレーナー会議の方々、本学理学療法学科の先生方に深く御礼申し上げます。



プールサイドの様子



プールサイドでのケアの様子



選手村内でのケアの様子



ルクセンブルクにて